出雲市消防本部　石飛恭助
題　名「磨けば光る原石」

【石飛さんの顔写真】

名前：石飛　恭助
いしとび　きょうすけ
ishitobi.jpg
ishitobi2.jpg
所属：出雲市消防本部
救命士合格：平成 12 年
消防拝命：平成 15 年
出身：島根県出雲市

「はじめに」

昨年、月刊消防 6 月号からスタートした“進め!民間養成校救急救命士”も今回で最終回です。民間養成校を卒業した救急救命士の熱き想いや現場での葛藤などが伝わったでしょうか。

私は、高校を卒業後、救急救命士民間養成校へ進学し、第 17 回救急救命士国家試験合格後、母校で専任教員として 2 年間学生指導にあたりました。

私の学生時代や学生教育に携わった経験、救急救命士民間養成校出身として就業後に感じた想いを最後にお話ししたいと思います。

「民間養成校の教育プログラム」

平成 10 年 4 月、私は兵庫県三田市にある救急救命士民間養成校（2 年制）に入学しました。入学から卒業までの流れは、1 年次は、外部講師（医師・看護師・助産師）から救急救命士標準テキストに沿って基礎医学、臨床救急医学総論、臨床救急医学各論といった人体の機能と構造や救急疾病などを学びます。部分科目が終了するたびにテストを受け、単位を取得していきます。

校内実習では、応急手当から始まりバイタル測定、BLS(写真 1)、資器材取扱い訓練などを中心とした実習を行います。

2 年次になるとその専門科目の内容もより深いものとなり、臨床救急医学各論では病態別疾患、特殊病態などを救急医から直接学びます。

校内実習でも現場で遭遇頻度の高い意識障害、脳疾患、循環器疾患、呼吸困難傷病者、外傷傷病者（写真 2,3）を想定したシミュレーションを行っていきます。

また、近隣の救命センターを中心に病院実習に出かけます。学生にとってこの期間が唯一臨床現場を体験できる時間となり傷病者と接し得る場になります。救急搬送されてくる傷病者を前にして直接、救急医や救急看護師から実戦に即した知識や技術を享受できる機会になります。一部の民間養成校では、消防署へ派遣研修を行い、救急車同乗実習をしているところもあります。民間養成校では、臨床の場で「学ぶ・体験をする」といった機会は限られており貴重な時間となります。

写真 1

BLS 訓練

写真２　外傷訓練

写真３
外傷特別実習

「民間養成校は、勉強漬けの学生生活」

夏季から秋季にかけて、消防本部へ就職を希望する学生は、地方公務員採用試験（消

防署採用試験）を受験します。冬季に入ると卒業試験を受け、合格した者は、最大目標である救急救命士国家試験へ向けて集中講義を受けます。このように、民間養成校では、知識・技術・試験（地方公務員採用試験を含む）を短期間で習得し、クリアしなければならないため、勉強漬けの学生生活を送るようになります（写真 4)。

私の場合、机の椅子に座り勉強をするという習慣がなかったので大変苦労しました。笑われるかもしれませんが、「机の椅子に座ること」から始めました。帰宅後、椅子に座りテレビを見て、食事をして、携帯電話をいじるなど、とにかく椅子に座る時間を長くすることから始めました。そこから、参考書を開き、眺める、読む、理解するといったように徐々に勉強する習慣を身につけていきました。

私の勉強方法は、授業で理解するというより、ひたすら救急救命士標準テキストを読むという方法でした。もちろん、読むもの、見るものすべてが初めての医学用語ばかりのため、最初は眩暈がしそうでした。テキストに穴が開きそうな位、毎日ひたすらテキストを読み、少しずつ理解していきました。

写真 2　民間養成校実習風景

「民間養成校で学生指導にあたった 2 年間」

在学最終学年の時、学校側から次年度、学校に残り学生指導の協力をしてもらえないかとの誘いを頂き、翌年度から母校に就職し、2 年間、4 期生のクラス担当となりました。

私に託された使命は、受け持った学生全員を 2 年後の救急救命士国家試験に合格させることです。

数か月前まで授業を受ける身だった私が、4 月になった途端、教育カリキュラムを作成し、さらに、学生生活指導、校内実習、国家試験対策指導、講師依頼なども行うこととなり、その仕事内容は多岐に亘りました。朝早くに学校へ行き、終電で帰るような生活で、学生時代につらいと感じていた勉強漬けの毎日の方が楽だったと思えるような多忙な毎日でした。

私が受けもった学生は、北海道から沖縄まで全国各地から集まっており、年齢層も高校を卒業してすぐの 18 歳から、大学や社会経験を積んだ 32 歳までと、とても幅広いものでした。

当時、私は20歳でしたから、学生と年齢が近い分、指導者と学生の距離を適度に維持しながら信頼を得ることに気を遣い苦労しました(写真5)。

指導者として、私が強く心がけていたのは、学生の質問には「的確即答」でした。ただ、私の持っている知識なんて、救急救命士標準テキストや医学書や参考書といった、いわゆる「教科書的」で「標準的」なものにすぎませんでしたので、休日を利用して消防署へ出向き、直接、現場で働く救急救命士から助言を仰ぎ、現場活動を照らし合わせ、そのうえで学生指導ができるように努めました。

学校行事で一緒に大騒ぎして楽しいこともたくさんありましたし、学生の思いをくみ取れず衝突したこともありましたが、2年後の国家試験に全員合格させることができ、喜びと責任を果たすことができたという安堵の想いでいっぱいでした。

私が担当した51名の学生も今では40名（内女性6名）が消防本部へ就職し、3名が自衛隊（衛生兵)、8名が病院、民間企業へ就職し活躍してくれています。

今では彼らも、よきライバルであり同職の仲間として「切磋琢磨」できる関係です。

母校での経験は、大変貴重であり私にとって財産となりました。

写真5　アメリカでの研修

「磨けば光る原石」

消防本部に採用された民間養成校出身救急救命士に就業後の想いについて聞いたところ「消防吏員として早く一人前になりたい」とか、「救急だけでなく火災でも現場に出て活動

することにやりがいを感じている」といった消防吏員として業務に対し前向きにとらえている一方で、「救急活動に不安がある」とか「先輩と一緒の活動では安心が出来る」というような臨床経験の少なさを露呈する不安な声もありました。

また、同じ資格でありながら「ELSTA（救急救命研修所）と比較されることも多く、それが悔しい」というジレンマも感じていました。

では、民間養成校出身救急救命士と ELSTA 出身の救急救命士ではどこが違うのでしょうか？(写真 6)

私の経験から感じた事は、傷病者に対しての観察・処置・医学的知識といった点についてはそこまで大きな違いはないように思います。違いがあるとすると、傷病者や関係者から引き出した情報と観察を結び付け、鑑別診断を組み立てていく能力ではないかと思います。問診で 8 割の診断がつくといわれており、観察につながる情報を傷病者や関係者からどれだけ引き出せるかは腕の見せ所です。

その他にもトラブルシューティング能力、コミュニケーション能力、他隊との連携能力、現場でのリーダーシップ能力、冷静沈着が求められる心肺停止傷病者の対応など、現場経験を積んでこそ養われる能力には違いがあると思われます。

この違いは、ELSTA 出身の救急救命士は現場経験を踏んだうえで教育を受けているため、得た知識を実体験に照らし合わせ、すぐに現場で応用することができます。

その点、民間養成校出身救急救命士は、現場経験もなく、多くの時間を机上での座学中心に教育をあてているため、「paper 資格者」となってしまいがちです。

しかし、このように新卒者が臨床に出て不安を感じるのは救急救命士だけとは限りません。他の医療職種である、医師、看護師、コメディカルもすべて「paper 資格者」から始まります。医師であれば、上級医の指導の下 2 年間の初期臨床研修を行い、看護師ならば看護協会が定める育成プログラムや病院独自のプリセプター制を設け育成にあたります。共通して言えることは、どの職種も対人医療職であり新卒教育プログラムが重要とされ、必ず先輩から指導を受け、時間をかけて OJT（on the job training）を重ね助言を受ける環境を設けています。

私自身、病院前救護における救急疾患重症度鑑別や搬送判断などは、職場や養成校での教養や訓練からだけでなく、実際に救急現場において先輩救急救命士から直接指導を受けたことが大きな財産となり自信になっています。

こうした養成校出身救急救命士の経験不足を補うような、意図的・計画的・継続的な OJT による教育システムを我々、先輩救急救命士が構築していかないといけないと思いますし、また、個人個人が弛まぬ自己研鑽を積んでいくべきと思います。

私も消防勤務 10 年目を迎え、指導を受ける立場から、指導する立場へと移りつつあります。自分が、現場で苦慮したことや葛藤したこと、人命救助に必要な知識と経験をどんどん惜しみなく後輩たちへ伝え、共に成長することができればと思います。

写真 6　出雲市消防本部民間出身救急救命士

「救急救命士の知識と判断力を必要としている」

現在（平成 24 年度）、民間救急救命士養成校で組織する一般社団法人全国救急救命士教育施設協議会（JapanEMT School Association）に登録されている養成校は、全国に 35 校（2 年制、3 年制、4 年制大学）あり、社会のニーズと並行し、年々増加する傾向にあります。

近年の国家試験では民間養成校から 800 人以上の救急救命士が誕生していますが、消防本部へ就職する者は、400 人前後と言われ、半数以上が病院、民間企業、警察、海上保安庁、自衛隊などへ就職しています。

救急救命士制度が発足して 20 年が経過し、救急救命士資格保有者は、全国に 4 万 5 千人いると言われています。そのうち 2 万 5 千人が消防職員として勤務しており一部が現役として病院前救護に当たり市民の生命を守っています。残りの 2 万人が、消防以外へ就職している現状になります。

救急救命士法第 44 条　「救急救命士は、医師の具体的な指示を受けなければ、厚生労働省令で定める救急救命処置を行ってはならない」また 2 項では「救急救命士は、救急用自動車その他の重度傷病者を搬送するためのものであって厚生労働省令で定めるもの以外の場所においてその業務を行ってはならない」とあるためメディカルコントロール体制が確立されている消防組織と海上保安庁でしか救急救命士の資格を存分に発揮することができない状況にあります。

私も現場活動の中で、病院前におけるバイスタンダーの重要性と有効性を身に染みて感じています。今は、一般市民に心肺蘇生法を指導しプレホスピタルで発生した傷病者は身近にいた市民の行動力に期待するしかありません。しかし、今 2 万人いるといわれる消防以外の救急救命士資格保有者の知識と判断力をプレホスピタルでファーストレスポンダー

と位置付け、活動できるようになれば救命率向上と救急車適正利用につながり、救命の連鎖の質が今よりも向上することと思います。

近年では、一日数千人から数万人が利用する集客施設等で民間養成学校出身の救急救命士が働いており、そこで発生した心肺停止傷病者の一次救命処置にあたり社会復帰に貢献したケースも沢山あります。

このように民間養成学校から誕生した救急救命士が消防・海上保安庁以外の場所でも自分の持っている知識と判断力を生かし活躍できることを願っています。

「まとめ」

平成 3 年に救急救命士制度が発足し、それから数年遅れて救急救命士民間養成校が創設され学生教育が始まりました。既に民間養成校から 2 万人以上もの救急救命士が誕生しています（写真 7)。

その間、病院前救護における救急救命士の期待と社会のニーズからメディカルコントロール体制の構築後、心肺停止傷病者に対して特定行為の処置拡大がなされ、今後は非心肺停止傷病者への処置拡大が検討されておりこれから先も止まることなく進み続けていくのは間違いありません。

飛躍的な進歩を続ける病院前救護でありながら、その一方で民間養成校出身救急救命士の問題点も浮き彫りになってきました。救急救命士の資格を有していても、活動の場に制限があるためその能力を発揮する環境が限られていることや臨床経験が未熟なまま傷病者対応にあたるなどのまだまだ改善を必要とすることが多いのも事実です。

私やこの連載に掲載した仲間たちもこの流れに取り残されることなく“進め!民間養成校救急救命士”の如く、必死になって自己研磨に努めていく所存です。

写真７
兵庫県三田市にある民間救命士養成学校在校生「磨けば光る原石」たち

シリーズ構成者　ご挨拶

「進め！救急救命士！」

江津邑智消防組合　天野忠好

写真８

この連載で救急救命士になる一歩手前の状態を、「ハチ救命士」と例えた筆者がいた。「救」という字を「９」と読み替えているのである。私はなるほどと思った。考えてみると別の見方もできる。「９」という字はさらに「苦」とも読める。すると救急救命士は「苦苦苦命士」となる。こんな名前の資格にすれば、きっと救急救命士の人気は失われるに違いないが、決して的外れな表現でもない。未熟な「ハチ救命士」から、例え成長したとしても、次に待つのは「苦苦苦命士」の世界だ。厳しい訓練や辛い現場、そして挫折。様々な苦が待ち受けている。それでは「苦」の次は何か。苦苦苦命士という字の並びを見ると、大きな苦労を３回乗り越えた先に「命」という字がやってくる。私たちは苦を乗り越えて進まなければ命を救うことは出来ないようだ。

この一年の間に１１名の救急救命士にご執筆頂いた。読者からは賞賛の言葉もたくさん頂いたが、また逆も然りであった。読者は好き勝手言うものだが、ただ間違いなく言えるのは、「苦」を一つ乗り越えた彼らは「命」に向かって誰よりも一歩前に進んでいるということだ。

手前味噌だが、この連載を終えた私もさらに前に進もうと思う。この最後の原稿を書いている前日、自宅に大学院の合格通知が届いた。４月からは消防吏員として仕事をしながら、１０年振りの学生生活がスタートする。

私たちは足を止めてはならない。医療従事者ならなおさら進み続けなければならない。さあ進もう！救急救命士！苦を超えて進んだ先に命がある。

最後に、読者の皆様、忙しいなか「苦」を受け入れて下さった執筆者の皆様、東京法令

出版の忠地さん、太田さん、そして玉川先生。一年間本当にありがとうございました。